

結社誌を訪ねて

中原 修子

どの菓子も何やら小振り四月馬鹿

平川菜穂子

「野火」四月号

「野火」は今年早々、創刊九百五十号を迎え益々歴史の重みを増しています。掲句は、「どの菓子も」という措辞によって、店先に並ぶさまざまな菓子の光景を一気に読者の前に広げています。色とりどりの和菓子、ケーキや焼菓子、スーパードの種々のスナックなど、店先の光景が立ち上がり、軽やかな印象を生み出します。そして、「何やら小振り」と続くところに、この句の魅力があります。「何やら」という言葉は、はっきりと言いつけられず、わずかな違和感や気づきを含ませる表現で、軽い皮肉やユーモアも帯びています。小振りで控え目な上品な菓子というより、どこか腑に落ちない、気掛かりな感覚が漂います。この曖昧さによって、読者はその理由を想像し始めます。紛争による資源・エネルギー・食糧価格の高騰や円高が続く昨今、袋詰めの菓子は量が少なくなり、形も小振りになりました。そこに季語「四月馬鹿」が据えられることで、句全体の調子は決定的に軽やかなものとなります。やや辛辣な響きを持つ季語ですが、いたずら心や諧謔味にも

溢れ、その日の街の空気や、人々の浮き立つ気分、また作者に代わって「馬鹿」と代弁してくれるような雰囲気もあります。本句は、「広く捉えて、柔らかに評する」という運びと、季語の巧みな取り合わせによって、日常のささやかな違和感を軽妙に掬い取った作品です。

鬼やらひ以下省略の鬼あまた

布施伊夜子

「鷹」四月号

「鷹」の分厚い結社誌には作品がぎっしりです。「鬼やらひ」、すなわち「追儺」は古代中国の「後漢書」にも記述がある古い習慣で、年末に疫病の鬼を追い払う行事が起源です。日本には奈良時代に伝わり、大晦日の鬼を追い払う宮中行事となり、室町時代以降は季節の変わり目の邪気払いと結びつき、現在の豆撒きの形へと変化しました。鬼たちは、本来なら、一体一体名指しされ退治されるべき存在であるはずですが、しかし、本作品での鬼たちは「以下省略」されており、きわめて事務的に現代的に語られています。読者は省略された鬼たちの存在をかねて強く意識し、同時に雑多で重要性の低い鬼たちとして認識することになります。さらに「鬼あまた」と粗く扱うことでその印象はいっそう明確になります。「取るに足らない鬼がやたらと多い」という滑稽な光景が浮かび上がり、鬼の威厳も形無しです。書かないことの効果

と異質な言語の取り合わせによって、節分の場面を愉快に描いた作品です。

肉体を喪ふ靴たちの冬日

五十嵐秀彦

「雪華」四月号

「雪華」誌の冒頭部分で、五十嵐氏は「不真面目に老いるということ」という時評を書いておられ、坪内稔典氏の『老いの俳句きみとつるりんしたいなあ』などの論説を取り上げられ、「老い」に立ち向かう気概を述べておられます。「境涯的あるいは日記的な俳句だけで押し進んでいけば最後には時代の勢いを失い、凡庸な感慨を演じてしまうしかなくなるのだろうか。」という危惧、そして「私にとつてのハチャメチャとは何か。鉄腕アトムになつてやろうかとも思うのであった。」という熱い思いが綴られています。今回取り上げた氏の掲句の隣に「両肩に父の癢痕雪の華」という作品がありますので、父上を亡くされた時のものであろうと拝察します。核心に「肉体を喪ふ靴たち」という措辞があります。靴は人の足に密着し、移動や生活の痕跡を担うものです。その靴から「肉体」が喪われたと言い切ることで履く人の不在とどこか不穏な様子が漂います。「失ふ」ではなく「喪ふ」という文字は、単に脱ぎ捨てられたのではないことを示します。父親の革靴、運動靴、長靴や草履などすべての靴が主人を亡くしてしまいました。また「たち」という複数形は、単に一個人だけでなく、災難や戦争によって生じた膨大な靴の遺品の存在という重いイメージまで

も喚起します。そして下五の「冬日」がこの作品を静かに包み込みます。明るいながらもどこか弱々しく、寒い季節の時間が止まったような感覚を伴う季語です。冬的光が肉体を亡くした靴だけを照らすことにより、父の永久なる不在や喪失の記憶を暗示し、読み手に深い余韻を残します。句柄の広い北国の方の作品です。

三味の音や上目遣ひの春の猫

谷村 康志

「円環」四月号

三味という語は、浄瑠璃や長唄、民謡など人の情を帯びた音の広がりを感じさせます。撥さばきの響きには、どこか遊芸の気配とともに、古雅な情感が宿ります。この句では、その音に誘われるように春の猫が現れ、「上目遣ひ」でこちらを見上げています。「上目遣ひ」という措辞が、単なる猫のしぐさを越えて、媚びるような、しかしどこか抗いがたい情の気配を帯びています。弦の音に応じるかのような猫のまなざしに、聴覚と視覚とがひそやかに通い合う一瞬が生まれます。さらに、三味の胴に張られた猫皮から生まれる響きに引き寄せられる猫の姿には、ふと因縁めいたものも感じられます。もしかしたらその音色の奥に、なめされて胴皮となったかつての伴侶の気配を探し当てたのかもしれない。作者はそれを取えずに語りませんが、読者は自由に想像の世界で楽しめます。春の宵、撥の音とまなざしのみを残して、かすかな情の余韻を深く漂わせる一句です。

（筆者住所

〒310-0853

茨城県水戸市平須町一八二八―五七二）